

[担当教員]

城戸崎和佐（京都造形芸術大学教授）

大谷弘明（日建設計） 近井務（大林組）

[Teaching Assistant]

崔秋韵（A63） 森川潤（A63） 森下孝平（A63）

■課題主旨

建築とはなにか。

建築を学ぶあなたたち学生にとって、建築の研究者にとって、そして私たち建築設計者にとって、これは、初源的かつ普遍的な問いである。その答えを探す場のひとつが大学の建築学科であるならば、さて、どんな空間がふさわしいのだろうか。

参照すべき古今東西の書物があり、図面や大きな模型を制作する場があり、木工房とデジタルツールを備えたファクトリーの両方があり、発表やレクチャーの会場となる専用ホールがあり、なにより友人や教員と建築について語りあう場が必要であろう。ときには夜を徹して議論し、制作し、ときには海外から建築家や学生を招いてワークショップをし、さまざまな出会いを誘発する場が望まれる。

建築を考え建築をつくるための建築とはなにか。それは、あなたたちを包み込む豊かな空間を考えることであり、周辺環境と交歓する空間を考えることであり、潜在的クライアントである一般市民に建築の素晴らしさが伝わる空間を考えることでありたい。

■概要

敷地は阪急六甲駅に隣接する、線路沿いの区画。（別添地図参照）。

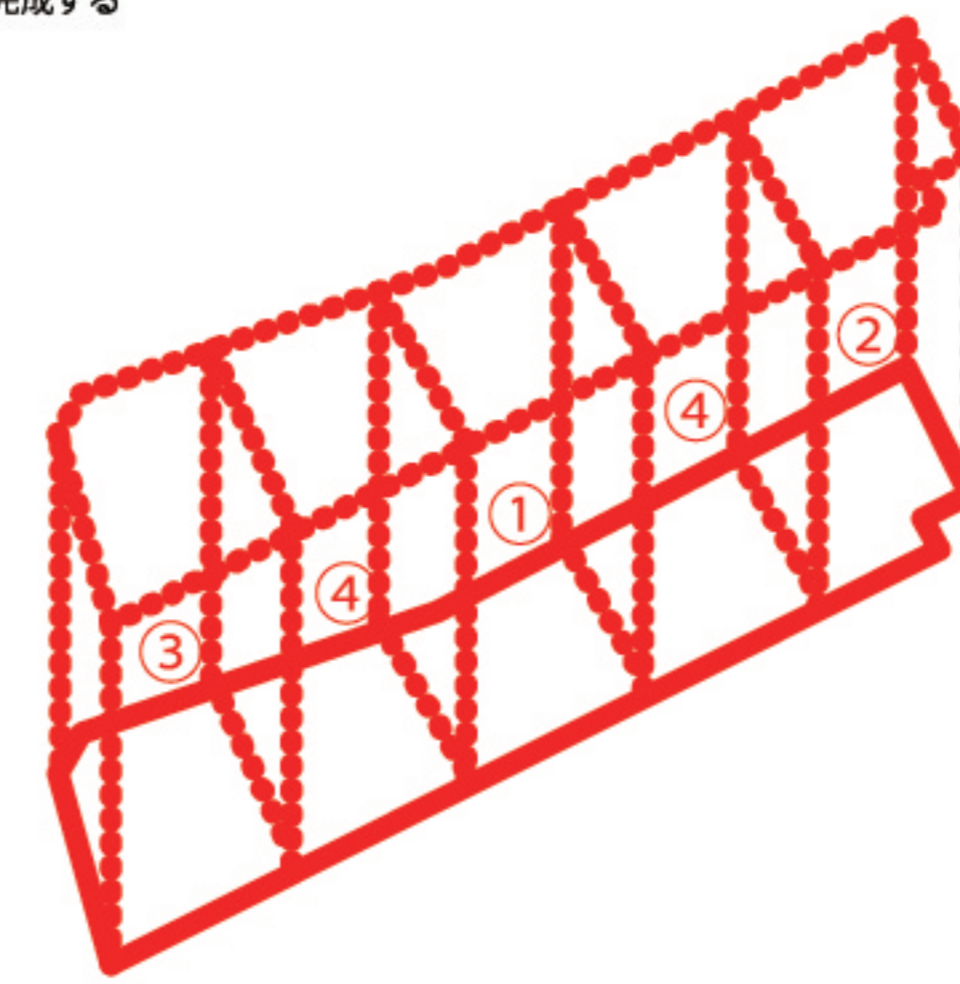
そこに、神戸大学建築学科の設計に特化した施設を設計する。対象者は3回生以上の学部生、大学院生（修士・博士）、留学生、研究者など。研究対象は意匠だけでなく、計画、歴史、環境、ランドスケープなども含むが、全員がここでは設計者であることを前提とする。設計行為をいきいきとしたアクティビティとして顕在化させる、魅力的な内部空間と外部空間をもつこと。1/1のモックアップがつくれる大きな（面積だけでなく高さにも配慮）空間をとること。一般市民と共有できる空間を含むこと。建築は3階以上とする。



国土地理院 地理院地図 (<https://maps.gsi.go.jp/>) をもとに編集者作成

エスキスの順番

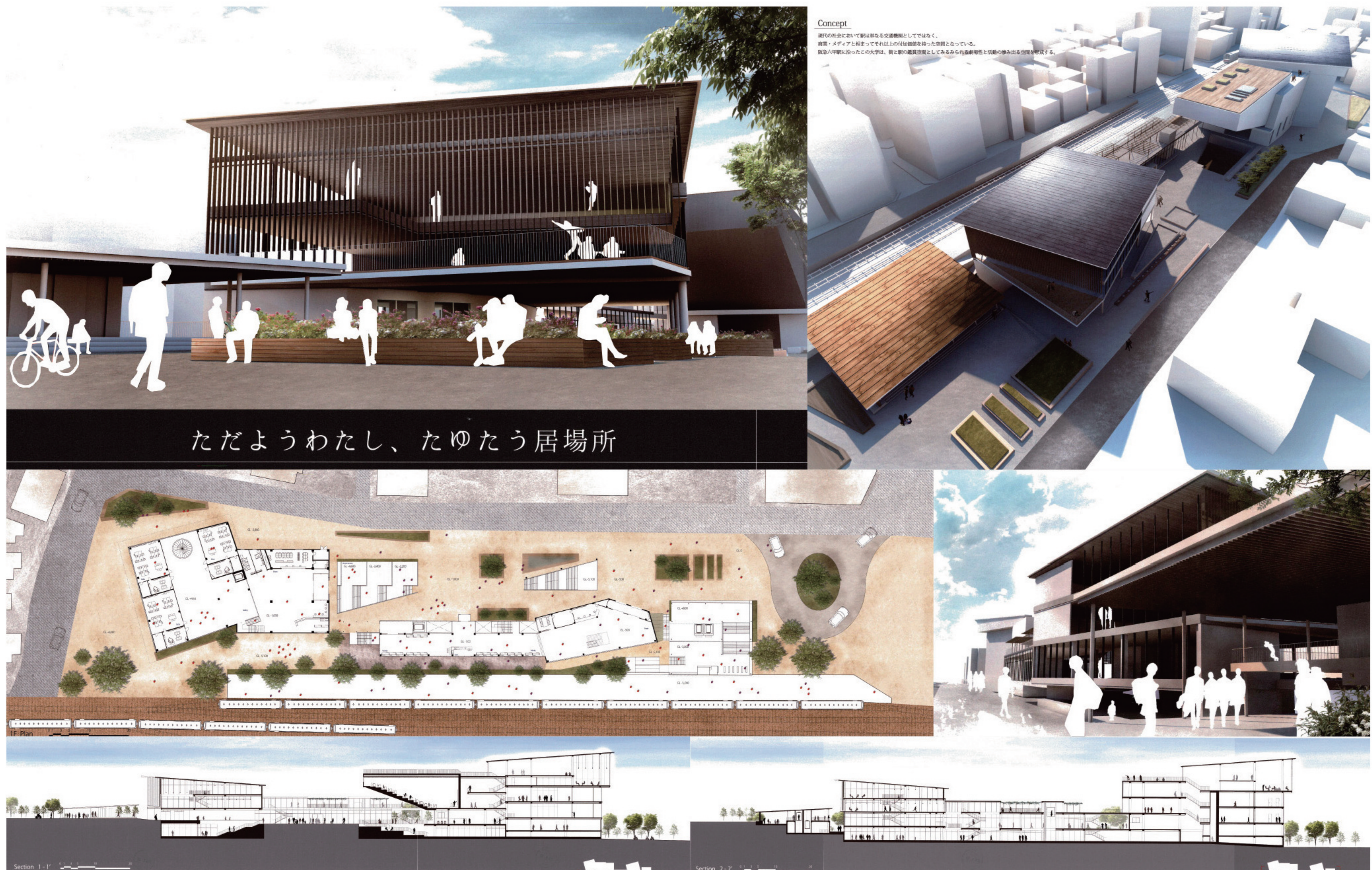
- *スケジュールの①は敷地の①の部分、②は敷地の②の部分、③は敷地の③の部分、④は敷地の④③の部分
- *スケジュールの⑤⑥は上記をまとめて全体像を完成する
- *敷地の切り分けはだいたい1/5ずつでOK



ただようわたし、たゆたう居場所

山本修大

インフラは都市の骨格であり、今や駅は交通だけでなくメディアとして大きな発信力を持っている。阪急六甲駅沿いを計画地とするこの施設は、交通・教育・商業が複合することで強い発信力を持ち、また駅と周辺を結ぶ干渉空間として機能することを期待したい。

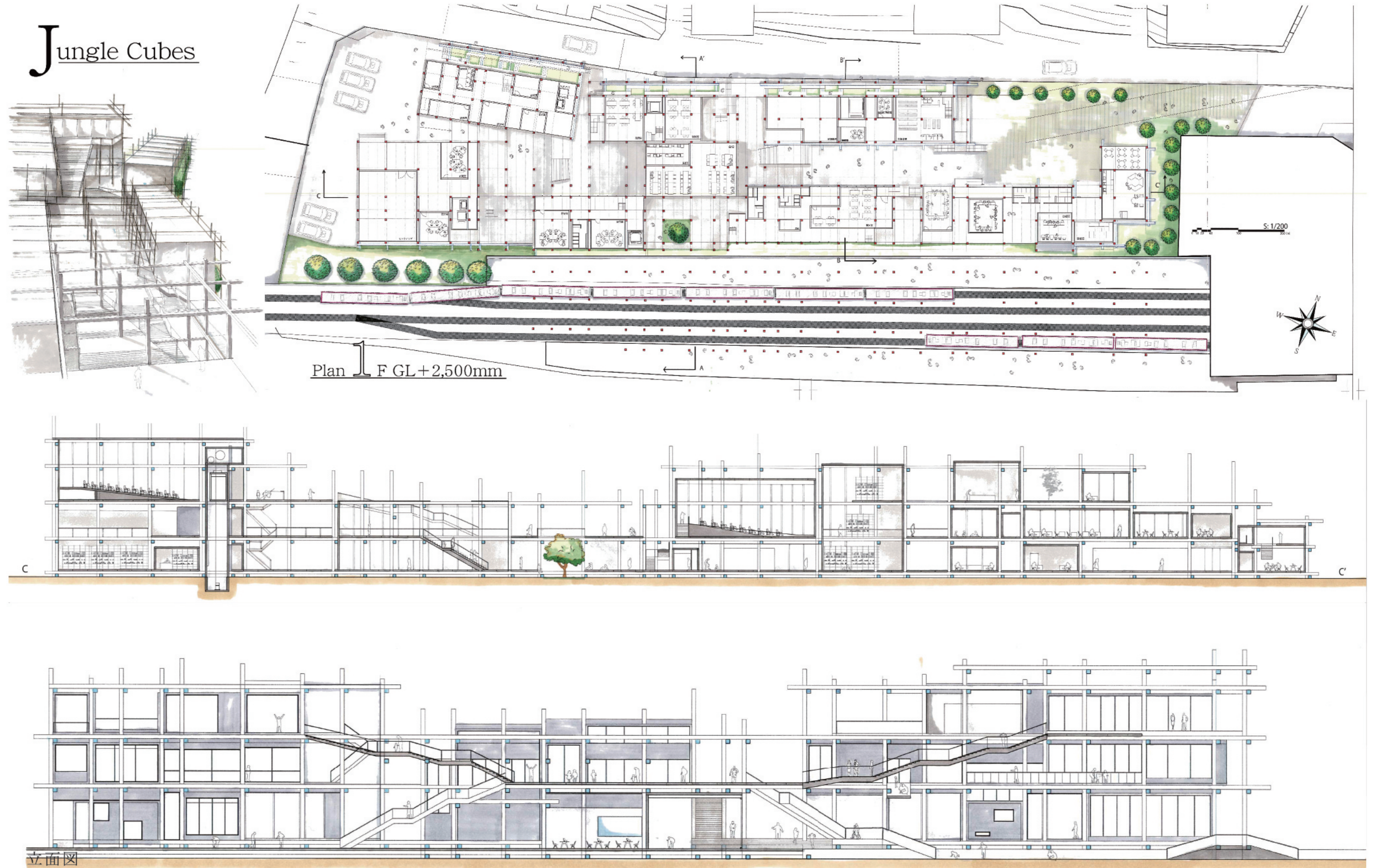


ただようわたし、たゆたう居場所

Jungle Cubes

川添浩輝

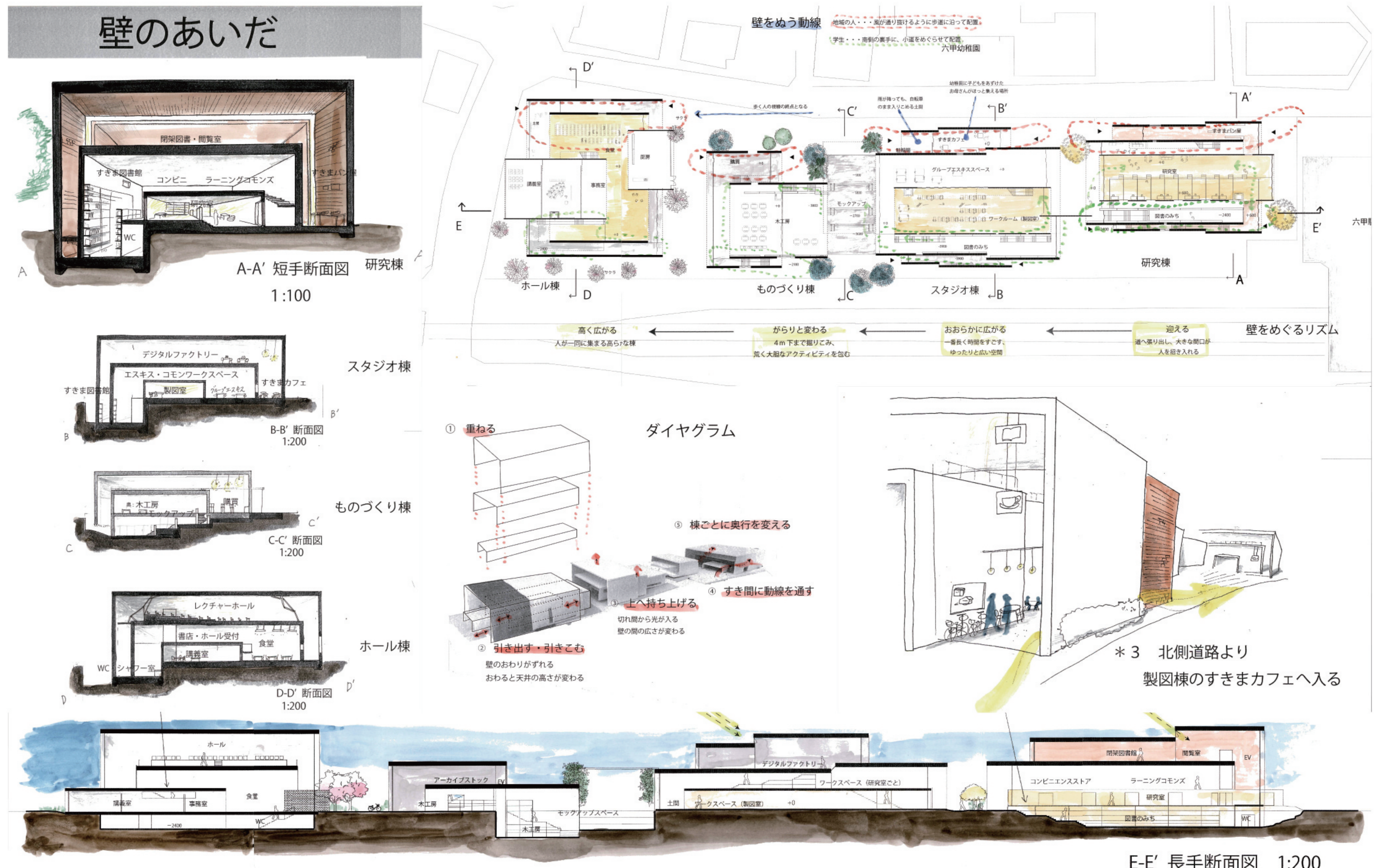
建築の構造諸元である柱と梁をあえて見える状態にすることにより、建築を学ぶ場としての空間を創造豊かなものにする。柱と梁で構成された躯体に面を挿入していくことで、これからの時代の流れに合わせ自由自在に変化していく建築を設計した。



壁の間

中川菜里

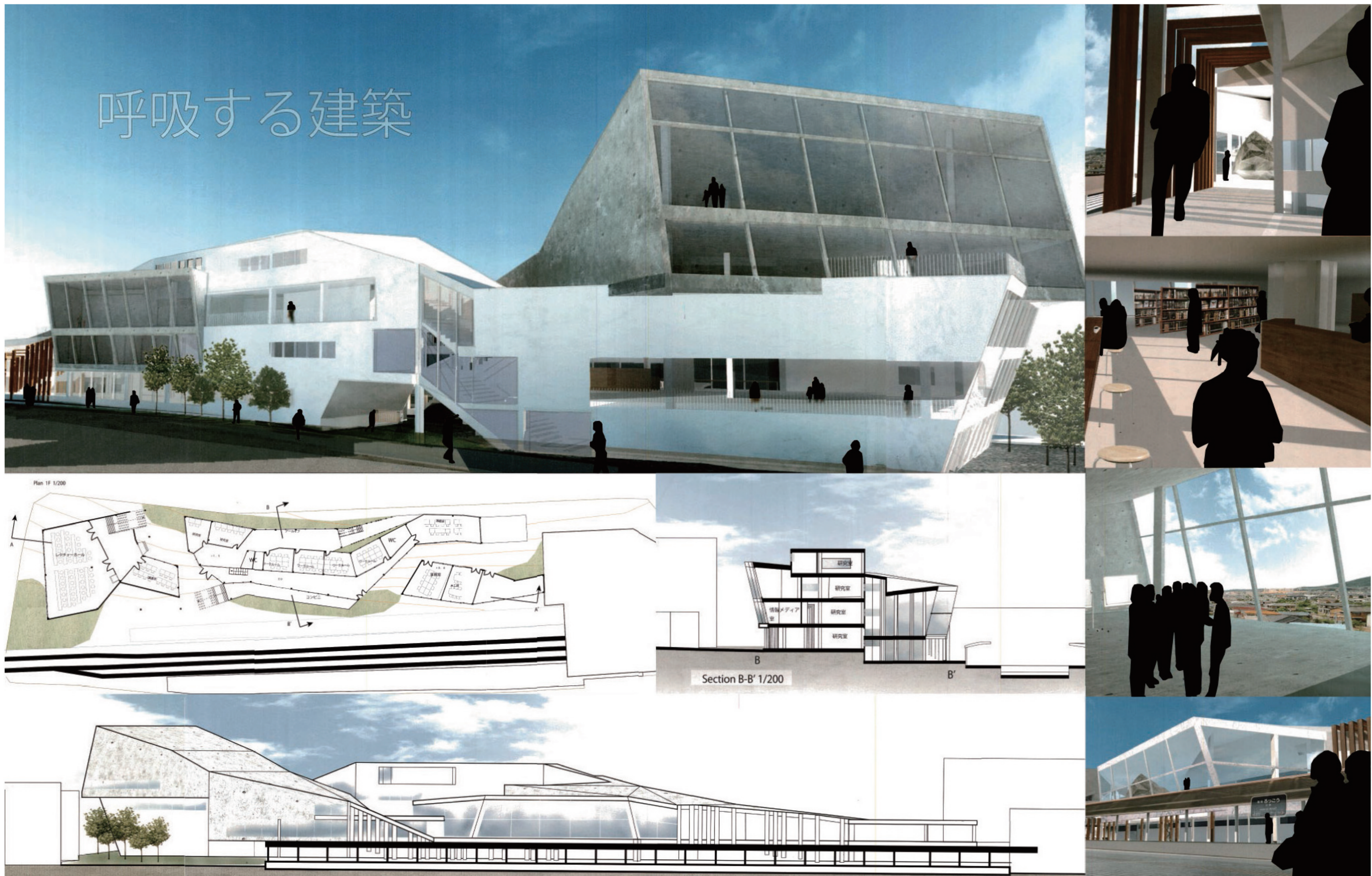
歩き、立ち止まりながらゆっくりと壁の間をすごせる空間を作った。多層に重ねた壁を縫うように動線を配し、本を手にする、腰かけて休む、作品を眺める、立ち話をするきっかけをちりばめる。一枚うちに入るたびに、広さ、素材、光が変わる新鮮さを味わってほしい。



呼吸する建築

楠満葉

駅という場所は人が集まり、混ざり合い、分散していく場所であり、その流れは止まることがない。この建築は、その流動性を失わせることなく一つの生命体のように人々を飲み込み、そして緩やかに排出していく。



Sunken/Student/Station

松田星斗

人の流れが激しく変則的な駅と大学に、動線の操作で立体的な関係性を与える計画を提案する。全体をサンクン型の構成とし、地上レベルからは学生のアクティビティが見渡せる。駅の日常と学生の活動が複雑に交錯し、街に新しい中心地としての風景をつくる。



